

## 解 答

一

問1 あ オ い イ う ア え 工 間2 質

問3 知識あるいは経験 問4 既知のものを再認すること。

問5 ウ 問6 思考的読書 問7 ア 問8 イ

問9 文学作品はA読みだけでなく、既知に助けられ、想像力によって新しい世界をとらえるというBでも読むことが可能であるから。

問10 工

問11 a 習熟 b 導入 c 課〔して〕 d 察知 e 独特（得）

二

問1 a 便利 b 盛〔った〕 c 否定 d 修行 e 商店街

問2 A ウ B エ C ア D イ

問3 あ ア い イ う 工

問4 食事の味や、だれかと食卓を共にしたり、会話したりすること。

問5 ウ 問6 ア 問7 ウ

問8 へその緒のように目に見えるものではなく、相手をどれだけ愛しているかということ。

問9 イ

三

問1 ① ア 口 ② エ 耳 ③ ア 手 ④ エ 腹 ⑤ イ 舌

問2 ① オ ② イ ③ エ ④ キ ⑤ ウ

四

① 有機 ② 報復 ③ 達筆 ④ 銭湯 ⑤ 羽織〔る〕

⑥ 映〔る〕 ⑦ 圧政 ⑧ 本尊 ⑨ 濟〔ませ〕 ⑩ 編集

## 解 説

一

問1 あ 「同じ」知識と「よく似た」知識は、似ていながらちがうものですから、「または」「あるいは」などの意味の、選択の接続語が入ります。 い 「区別がはっきりしていない」のであれば、「移行はどうしたらできる」のか、考えることがないのも納得できることです。つまり、前者が後者の原因となっていると読み取れます。  
 う 前段落でAの読み方、Bの読み方と説明てきて、この段落でCの読み方とつづくので、「添加」の接続詞がふさわしいとわかります。 え 「ぶつかっていく」ことを何度も繰り返すうちだんだんと「わかってくる」のです。  
 時間の経過を表す言葉がふさわしいですね。

問2 Aの読み方とBの読み方が全く違うことは、文章から読み取れます。Aに習熟してもBができるとは限らないのです。習熟とは、訓練を積み重ねてそれがしっかりとできるようになった状態ですから、AとBとの違いは表面的なものではなく、その中身、内容にあるということができます。そのような意味を持つ一字の漢字は、文中もありますので、探してみましょう。

問3 「前の再認と違って」とありますので、再認、すなわちAの読み方にあるものです。そして、「下敷き」ですから、基本となるもの、この読みをするにあたって、前もって備えているもの、と考えることができます。すると、三行前の「読む側に、『知識あるいは経験』が先にある」に着目できることでしょう。

問4 直前の「Aだけにとどまって」から続けて読むと、「それ」=「A」は自明ですね。そこでAはどのような読み方だったか、さかのぼって探せばいいわけです。すると、本文2行目に「Aとする」と述べられている読み方「既知のことを再認する」が書かれていると確認できます。

問5 傍線直前に理由が書かれているので着目すると、「読者に親切な表現がつよく求められる」とあります。言い換えれば、読者の読みやすい表現、易しい表現が強く求められている、ということ。求められるままに書けば、もちろん、出回る本は易しい表現の本ばかりになりますね。

問6 語句意味だけで考えると、「量」⇒「質」と考えて、「質」についている言葉をさがすことになり、苦労してしまうでしょう。ここは、内容からしっかり考えましょう。「量的読書」とは「Aの読み方」でたくさん読むことにはなりません。理屈で考えても、BやCの難解な読み方でどんどん数をこなすのは一般には不可能ですから、量的読書はAの読み方です。このような、「ただ知るだけの読み」とは違う読書を、筆者はどう呼んでいるか、という問で

すから、B・Cの読み方の説明において「○的読書」のような言い方をしていないか、探せばよいのです。すると、二行前の「思考的読書」を見つけることができます。

問7 まず直前を見ます。「昔は、一足飛びに高度の未知を読ませる素読を課していた」とあります。これはいきなり「C読み」をさせていた、ということです。なぜいきなり、難解なC読みをさせていたのでしょうか。「Cの読み方」について説明している部分（中略の直前の形式段落）に注目しましょう。ここでは、難解な読み方に対し、何度も体当たりでぶつかっていけば、おぼろ気ながらでも理解できるようになる、と述べています。つまり、Aから順々に……というやり方をしなくても、いきなりCにいっても、体当たりで訓練していけばなんとか読めるようになる、と述べているのです。

問9 「それ」が指すのは、「AからBへの移行の橋渡し」ですね。ということは、文学作品を読むことが、「A読み」から「B読み」へと移行するのを手伝ってくれる、という意味になります。なぜそれが可能か問うているので、文学作品の読まれ方を説明している、最終段落に着目します。文学作品は（物語の筋への興味をかきたてる、といった意味において）親しみ易く、一見A読みでわかりそうなので、読者は入っていきやすい。しかし、そこには未知の世界もあるわけです。読者は、分からぬところは想像力で補いつつ、今までわかったところの延長線上に理解を試みようとする。そうすることで、未知が既知に変わっていくのです。これが「A読み」から「B読み」への移行ということです。後ろから三行目の文の表現を用いて、字数内におさまるように工夫してみましょう。

問10 正解のエは、本文14・15行目および24行目に書かれています。ア 「どんな内容の本も～」の部分が合っていません。イ 文の後半部分は本文に述べられていません。ウ A読みの必要性だけを述べていて、本文の趣旨とはどちらかというと逆です。

## 二

問2 A アカウが迷うところですが、Cに「落ち着きのない（Cの三行後）ようす」、つまり「そわそわ」が入ることや、ここは「捨て子疑惑」が明らかになる、運命の瞬間を待っている気持ちであること、などから、「どきどき」がふさわしいとわかります。B 「へその緒？」とききかえしていますので、何の話をしているのかよくわからぬ、という表情です。D 「このままいけば」「禿げる」と9歳にして言われた育生の心境を考えます。

問4 まず、「食べることそのものの楽しみ」＝「味わうこと」があります。「蛸が柔らかくておいしいわ」（6ページ6行目）という言葉からも「味わう楽しみ」が読み取れます。それから、育生に注意したときの言葉「食事の時は～ダメなのよ」（6ページ8・9行目）からは、「誰かとともに食事を楽しむこと」を母さんが大切にしていることが読み取れます。これらのことと30字内でまとめます。

問5 「独り言」と言いつつ「でかい（声）」とあるので、わざと育生に聞こえるように言っているのです。しかも、この言葉を聞いて育生は「はっとし」て「まんまと騙されるところだった」と思っているので、どちらかと言えば、育生は「捨て子疑惑」のことを一時的に忘れていたと読むことができます。本当に都合の悪いことを、わざわざ息子に思い出させるはずもないで、こんなことを言うのは、「捨て子疑惑」にも対応できる母さんの余裕の表れであると読みます。さらに、面と向かって真面目に話すのではなく、「でかい独り言」として口にするようすには、クイズに気をとられて肝心なことを忘れている幼い息子を軽くからかっているようなニュアンスがあります。

問6 問2 A参照。長年にわたっての「捨て子疑惑」がいよいよ明らかになるとあっては、どきどきせずにはいられませんね。それ以外の特別な感情は、本文中からは読み取れません。

問7 「けろりとした顔」とは「あっけらかんとした、なんもないような表情」ということです。「哺乳類はお母さんのお腹から生まれてくるのだ」と傍線二行後に育生は思っていますが、9歳の子さえ知っているこういった常識を、平気でくつがえすようなことをいう母さんの思惑は何か、という問いです。この後母さんは、「21世紀だから卵で産める」とか「へその緒はスーパーで買える」など、どんどん突拍子もないことを言いますが、結局は「へその緒」なんて「親子の証し」にはならない、ということをいうための母さんらしい言い回しに過ぎません。問5の「クイズ」でもそうだったのですが、まだ幼く、何でも真に受けれる年頃の息子との会話を、母なりのユーモアの精神で楽しんでいることが、この部分のみならず、文章のあちこちで見て取れます。

問8 育生は「へその緒」が「親子の証し」だと思っているので、「へその緒」は違う、と言わなければなりませんが、「へその緒」に限ったことではなく、「目に見えるもの」にこだわってはいけない、と母さんは言っています。（9ページ6行目）そして、「本当の親子の証し」を見せると言って、（息ができなくなるほどに）「僕を思いっきり抱きしめ」（9ページ12行目）「母さんは、誰よりも育生が好き」（10ページ5行目）と言います。つまり、「証し」は目に見えないもの、母から息子への愛情の深さだといいたいのです。

問9 問5・7でも述べてきた母さんの個性的な言動に、9歳の育生はめまぐるしく振り回されではいますが、最後に「とにかく母さんは僕をかなり好きなのだ。それでいいことにした」（10ページ後ろから2行目）と、納得していることを読み取りましょう。